

## 和歌作品の解釈を通して自分のものの見方、感じ方、考え方を深めるための指導

－ I C Tを活用した学び合いを通して－

宮城県塩釜高等学校 青山 傑

## 1 はじめに

平成28年度の中央教育審議会において、高等学校国語科では、教材への依存度の高さ、古典に対する学習意欲の低さが課題として指摘されている。

古典の授業における自身の実践を振り返ると、古典を読むために必要な文法や表現の重要性を意識するあまり、作品を通して、自らのものの見方、感じ方、考え方を深めるための指導が十分にできていなかったように思われる。そのことから、令和6年度に担当した第3学年古典探究「読むこと」の指導ではI C Tを活用した協働的な読解スタイルを定着させる試みを行った。学級内で共有のデジタルノートを作成し、古典作品の解釈に必要な文法的な知識や文化的な背景、各々が読み取った内容などについて、複数人で一冊のノートを同時に編集することで自ら古典作品と向き合い、内容を読み取ろうとする姿勢を養うことができた。一方で、内容の把握に終始し、作品の良さを味わうことができていない生徒もみられた。そこで、今年度担当する第1学年言語文化においては、古典特有の表現、文体や語句の選択などに着目しながら、I C Tを活用した学び合いを通して、自らのものの見方、感じ方、考え方を深めさせる指導について研究したいと考えた。

## 2 研究の内容と方法

## (1) 研究の内容（主題について）

本研究は、高等学校第1学年「言語文化」B読むことにおいて、和歌作品を扱う二つの単元の授業実践を通して、自らのものの見方、感じ方、考え方を深めさせようとするものである。学習材には、古典特有の表現や修辞法、語句の選択の巧みさなど、限られた文字数の中で、重層的な表現を生み出すための要素が多く含まれる和歌が適していると考えた。

## (2) 研究の対象について

第1学年「言語文化」を受け持つ3学級の生徒119名を対象とする。4月に初めて古典を学ぶにあたり、国語や古典に関する意識調査を実施した。以下に結果を示す。

表1 国語や古典に関する意識調査の結果(4月実施)(%)n=119

項目	はい	どちらでもない	いいえ
国語の授業は好きか	52(43.6)	62(52.1)	5(4.2)
古典や古文は好きか	9(7.5)	36(30.4)	74(62.1)

「国語の授業は好きか」という問に対しては、「はい」と肯定的に答えた人数が52名(43.6%)であったが、「古典や古文は好きか」という問に対しては、「はい」は9名(7.5%)であり、「いいえ」は74名(62.1%)、「どちらでもない」が36名(30.4%)であった。古典や古文が好きではない理由として「言葉の意味の違い」「古文特有の言い回しの難しさ」を指摘するものが目立った。国語の授業そのものは「好き」と答えた生徒の中にも、古典に対する苦手意識や学習意欲の低さが表れた結果となった。

## (3) 研究の方法（手立て）

本研究では、授業実践I・IIのそれぞれでI C Tを活用した学び合いの場面を設けて単元を計画した。授業実践Iでは、他の生徒と協働し学び合い、自らの考えを広げるためにI C Tを用いた。授業実践IIでは、自らの解釈を踏まえ、他者の意見を参照し考えを深めるためのI C T活用場面を設定した。

## 3 授業実践Iについて

単元名：「和歌に表れたものの見方、感じ方、考え方を捉える」

学習材：『万葉集・古今和歌集・新古今和歌集』（大修館書店『言語文化』）

指導事項：〔知識及び技能〕(2)ウ及び、〔思考力、判断力、表現力等〕B(1)イ

## (1) 単元の内容と生徒の取り組み

## ① 和歌の鑑賞文の作成

和歌に表れたものの見方、感じ方、考え方を捉えるために、本単元のまとめの課題として、和歌の解説動画を作成する学習活動を設定した。

動画作成の前段階の学習として、個人で掘り下げたい和歌の一つを選び、鑑賞文を書くための調べ学習を行った。教科書や国語便覧、インターネット検索などを使って調べた情報をもとに、200字～300字程度で鑑賞文を作成する。鑑賞文では、和歌の解釈、古典特有の表現、当時の文化的背景や、作者の情報などについてまとめることとした。

## ② 和歌を解説する動画の作成

その後、書いた鑑賞文を基に2～3人のグループを編成し、選んだ和歌についての2分程度の解説動画を作成した。動画の内容をグループで整理し、言語化する学び合いの過程で、読み取りの精度を高めつつ、自らの考えを広げることをねらいとした。

グループAの動画は、在原業平の和歌「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」について解説したものである。約2分程度の動画の後半部分では、和歌に用いられている表現や文法、和歌としての良さに触れている。「もしもこの世に桜というものがなかったならば」という反実仮想の表現が用いられていることを説明したのち、「散ってほしくない」という、桜を愛する作者の感情について自分自身の言葉で言語化している（図1）。和歌に表れたものの見方、感じ方、考え方についてまとめており、十分に説明できていると捉えられる。

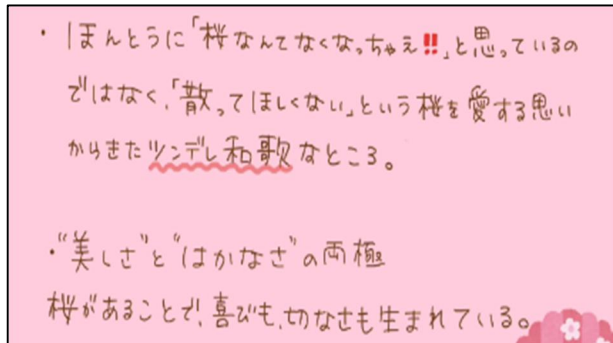


図1 グループAの動画の一部

また、動画作成後の個人の振り返りとして、以下の質問をした。

ア グループ活動における自らの役割について

イ 解説動画作成後の自らの解釈について

ウ 授業のねらいをどのような点で達成できたか

図2は、上述のグループAの動画を作成した生徒Aの振り返りである。動画作成以前の解釈は、桜の散る悲しみや儂さについて述べた一般的なものであったが、グループでの動画作成を経て、自分と異なる視点に触れることで、自らの考え方が広がったことを具体的に記述している。

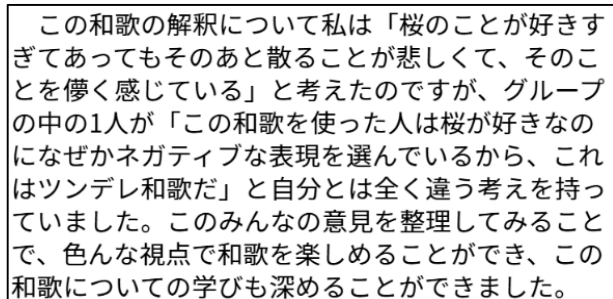


図2 生徒Aの振り返り記述

### ③ 共有ノートによる生徒同士の学び合い

動画の作成段階では、オンライン授業支援ソフトの共有ノート機能を使い、グループ内の生徒同士の学び合いを通して学習する場面を設定した。個人で書いた鑑賞文をグループ内で共有し、調べた成果物や動画作成に必要な資料などを、共有ノート上に集約して個人とグループの学びを往還できるようにすることで、学び合いが促された。また、授業以外の時間を活用して自らの担当箇所を自主的に作成したり、グループで作業をしたりする生徒も見られた。

さらに、各グループの動画作成状況を教師側が把

握できることから、学び合いが停滞しているグループに対するアドバイスを行うことができ、動画に盛り込むべきポイントを明確にすることにつながった。

### (2) 生徒の取組に対する評価

ICTを活用した生徒の取組については、〔主体的に学習に取り組む態度〕の評価として、単元の振り返りを基に行った。動画を作成する過程における自らの役割や、解釈の変容について記述した内容を評価対象とし、動画作成に至るまでの学び合いを通して、生徒の学習の到達度を見取った。

### (3) 成果と課題（成果：○、課題：●）

○グループで解説動画を作成するという活動を通して、解釈の妥当性と客観性を意識しつつ、和歌に表れたものの見方、感じ方、考え方を捉えようとする姿が見られるようになった。

○ICTを活用した学び合いを通して他の生徒の解釈に触れることで、自身の元々の考えを改めて見つめたり広げたりしようとする記述が見られた。

●学び合いの中で自由な発想が生まれる一方で、作品を踏まえた自らの解釈や考え方が他の生徒へ説明できるような整合性を有しているか、という視点に至る手立ての必要性を感じた。

## 4 授業実践Ⅱについて

単元名：「歌物語の和歌を書き換えて、ものの見方、感じ方、考え方を深めよう」

学習材：『伊勢物語』『筒井筒』（大修館書店『言語文化』）

指導事項：〔知識及び技能〕(2)イ及び、〔思考力、判断力、表現力等〕B(1)オ

### (1) 単元の内容と生徒の取組

#### ① 和歌のシーンを物語化する活動

課題「和歌が詠まれた具体的な場面や、心情の変化について想像し、短編の物語文を作成しよう」

生徒は作中の和歌のうち以下の3首から1首を選び、400字～600字で短編の物語文を作成した。

・和歌ア「筒井筒筒井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに」

・和歌イ「風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆるむ」

・和歌ウ「君があたり見つつを居らむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも」

物語文の内容は、和歌が詠まれた具体的な場面や、登場人物の心情、単語や文法的な表現、表現技法などに注目して描写するものとした。

生徒Bは、和歌イから物語文を作成した。和歌を詠むに至るまでの男と女のやり取りを想像して補ったり、元の妻の心情などを、独白や会話文によって描写したりすることで掘り下げて解釈を深めようとしている。



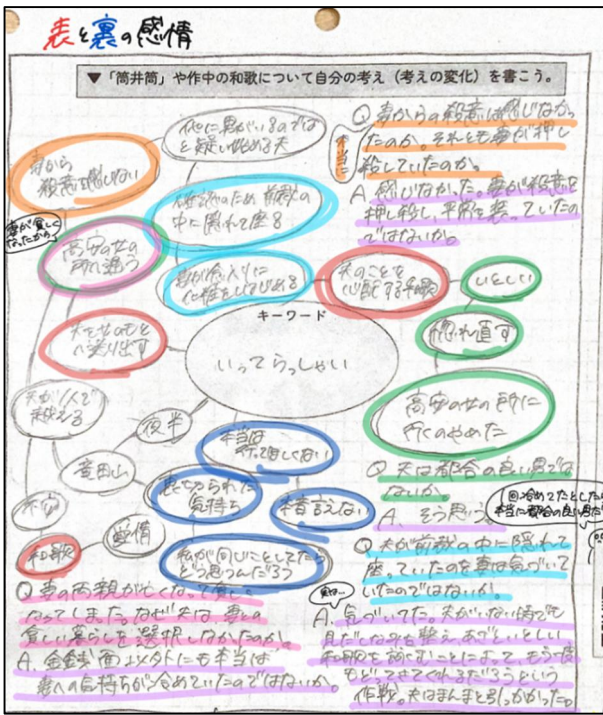


図7 生徒Cの振り返りワークシート

(2) 成果と課題（成果：○、課題：●）

○生徒自身の端末でテキストマイニングを行うことで、他の生徒のコメントを参照するだけでなく、単元の学習や作品に対する自らの考えを深めるための最適なキーワード設定ができた。

○テキストマイニングを利用したキーワード選択を生かすために、自由度の高いワークシートを使用したことで、ウェビングの手法を用いて考えを広げることや、イラストや数直線、グラフを用いた図示、自ら立てた問いによって考えるなど、生徒が考えを深めようと試行錯誤する過程が可視化された。

●キーワードを思うように設定できなかつたり、ワークシートへの取り組み方が分からなかつたりして考えを深めるに至らなかつたものが10人ほど見られた。キーワード設定後に、個人で考えを深める時間が多かったことが原因として考えられる。単元計画・構成の精査により、生徒同士の学び合いの時間を増やす必要があると感じた。また、キーワード選択までの声掛けをさらに充実させるなどの工夫が必要だと感じた。

4 おわりに

(1) 古典に対する意識調査の結果

授業実践Ⅰ後の7月に、4月と同項目で同学級の生徒117名を対象とした意識調査を再度行った。

表2 国語や古典に関する意識調査の結果(7月実施)(%)n=117

項目	はい	どちらでもない	いいえ
国語の授業は好きか	71(60.6)	43(36.7)	3(2.5)
古典や古文は好きか	17(14.5)	85(72.6)	7(6.4)

「古典や古文は好きか」という問に対して、「いいえ」と回答した生徒の数は4月実施調査の74名(62.1%)から7名(6.4%)へと大きく減少した。「はい」と回答した17名の中には、共有ノートを使用した個人とグループでの学びの往還や、動画作成を通じた話し合いで自己の考えを広げる中で、古典への理解が深まったことを理由として挙げているものもいくつか見られた。ICTを活用した学び合いを通して、古典に対する意識が変容したことが分かる。

また、授業実践Ⅱ後の11月に実施したアンケートの自由記述では、古典作品の中で語られることの少ない人物の心情や価値観について、作品を読み解いていく中で自らの解釈に至る面白さに言及したものが多く見られた。妻問婚や和歌の贈答による恋愛という古典世界の常識と、現代の感覚との違いに対する疑問や驚きについても、作品成立当時の文化的な背景への理解を踏まえつつ、登場人物の置かれた境遇や行動、判断などを、自らに引き寄せて考えている記述も見られるようになった。

(2) 研究主題・副題についての検証

本研究の主題は「和歌作品の解釈を通して自分のものの見方、感じ方、考え方を深めるための指導」であった。

授業実践Ⅰ後の意識調査における生徒の自由記述で最も多かったものは、動画作成の際の意見の共有により、異なる解釈に触れて自身の解釈や考え方を相対化することや、動画としてどのように表現するか話し合いながら、和歌に描かれたものの見方、感じ方、考え方を理解することの面白さに関するものであった。

授業実践Ⅱでは、和歌から物語文を作成する過程で、古典世界の常識や価値観に基づき、当時の人々の視点や立場を意識しながら、登場人物の心情や行動について、生徒は自らの解釈を様々な表現で掘り下げた。その後の振り返りの記述では、コメントの集約やテキストマイニングを利用した焦点化など、ICTを用いて他の生徒の考えを基に自分の考えを深められることへの言及が多く見られた。また、その後の単元では、ICTを利用して他の生徒と考えを共有することや、コメントとして自らの意見を述べたり他者のコメントを参照したりすることに前向きな様子が目立つようになった。

授業実践Ⅰ・ⅡにおけるICTを活用した学び合いを通して、和歌作品を解釈する中で、生徒が自らのものの見方や感じ方、考え方を深めるための指導の在り方についての方向性を示すことができたと考えている。

**【図表等の許諾について】**  
図1～3、図5、図7は生徒が作成した成果物の一部である。研究の目的のみに使用することとし、生徒本人及び所属校の校長から使用許諾を得た。